大阪交響楽團
人形浄瑠璃文楽

主宰 朝日新聞社

第壹回

新橋演舞場

親切感謝明るい帝都

愛國百人一首

初春の初日かゞよふ神國の神のみかげをあふげもろもろ　荒木田久老

八束穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも　橘千蔭

香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり　上田秋成

かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが樂しさ　栗田土滿

遠つ祖の身によろひたる緋緘の面影浮ぶ木々のもみぢ葉　蒲生君平

大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあらすな　賀茂季鷹

青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよ此の正道を　平田篤胤

一方に靡きそろひて花すゝき風吹く時ぞみだれざりける　香川景樹

安見しゝわが大君のしきませる御國ゆたかに春は來にけり　大倉鷲夫

かきくらすあめりか人に天つ日のかがやく邦のてぶり見せばや　藤田東湖

大阪 文樂座人形淨瑠璃芝居

吉例全員引越興行

第一回外題（一日より五日まで）

父は唐土
母は日本
國性爺合戰
梅壇女道行の段より
獅子ケ城の段まで

菅原傳授手習鑑
寺子屋の段

生寫朝顔日記
宿屋の段
大井川の段

◇七月の松竹各座◇

歌舞伎座

一　妹背山婦女庭訓　御殿の場
二　素袍落　竹本連中
三　一本刀土俵入　二幕
四　玉屋　清元連中

東京劇場

一　幻燈部屋　三幕
二　上羽の禿下五月雨　長唄連中
三　みれわら　三幕

明治座

一　お目見得だんまり　一幕
二　赤穂義士審判　三幕
三　道行初音旅　常磐津連中　竹本連中
四　東海道中膝栗毛　三幕

恒例尾上菊五郎一座

喜多村緑郎　大谷友右衛門　加入

毎夕四時・日曜晝間興行十一時

藝術座水谷八重子一座

日曜晝間興行十一時

七月興行大歌舞伎

御觀劇料（税共）

歌舞伎座	九・四〇	六・六五
	六・七〇	三・六八
	四・〇〇	二・〇八
	二・四〇	一・二〇
	一・一〇	
東京劇場	七・六〇	
	四・〇〇	
	二・四〇	
	一・二〇	

乍憚口上

御ひゐき皆々樣彌々御清祥の段大慶至極に奉存候　扨て當る七月興行の儀は當場吉例により大阪名物文樂座人形淨瑠璃を迎へ本邦特有の由緒深き世界に誇る古典藝術の御鑑賞を願ふことゝ相成り候

今度も太夫、三味線、人形遣全員上京致し名曲數々選擇の上豪壯華麗なる配列をなし十分に古典の妙味を發揮致す事に苦心罷在候へば必ずや御期待に添ひ得るものと確信仕候　何卒倍舊の御引立を以て陸續御來場の上御批判御評判の程伏て奉懇願候

昭和十八年七月吉日

文樂座　敬白

昭和十八年七月一日初日

毎夕四時開演

外題五日目替り

◎各等學生團體に限り半額

御觀劇料

一等…(御一名)…七圓三十五錢(稅九割共)
二等…(御一名)…四　圓(同六割共)
三等…(御一名)…二圓四十錢(同　)
三階…(御一名)…一圓十錢(同四割共)

切符取扱所

銀座地下鐵街芝居切符賣場
電話銀座一八一七六九七〇
プレイガイド各店取扱
銀座本店電話京橋(五〇一一より五〇一三まで)

切符賣場用　電話銀座　七五七
事務所用　電話銀座　七五八
お客用　一九〇

木挽町　新橋演舞場

太夫・三味線連名

竹本七五三太夫
鶴澤綱造
竹本濱太夫
鶴澤燕三（友花改メ）
豐竹松太夫（呂賀太夫改メ）
野澤松之輔
豐竹松島太夫
鶴澤清廣
竹本越名太夫
野澤錦糸
竹本隅若太夫
豐澤仙三郎
豐竹宮太夫
野澤勝太郎
竹本津磨太夫
野澤市治郎
豐竹つばめ太夫
豐澤廣二
豐竹千駒太夫
豐澤團伊三
竹本雛太夫
鶴澤友衛門
竹本伊達太夫
野澤喜左衛門
竹本南部太夫
鶴澤重造
竹本織太夫
竹澤團六
豐竹呂太夫
豐澤仙糸
竹本相生太夫
野澤吉五郎
竹本大隅太夫
鶴澤清二郎
豐竹古靱太夫
鶴澤清六

人形遣連名

桐竹紋十郎

吉田文五郎
吉田玉造
桐竹門造
吉田玉市
吉田榮三郎
吉田多三郎
吉田文二郎
吉田文枝
吉田兵二郎
吉田玉枝
吉田藤一
吉田常次
吉田光次
吉田榮市
吉田駒三郎
吉田兵次
吉田小兵吉
桐竹政龜
吉田玉米
吉田兵枝
吉田龜之助
桐竹小紋
吉田龜夫
桐竹紋之助
桐竹門次
吉田玉男
桐竹紋昇
吉田萬次郎
桐竹紋司
吉田玉德
桐竹紋太郎
吉田玉助
吉田榮三

小川彌三郎

桐竹龜松
吉田光造（光之助改メ）

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちそうなことを、簡單に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと――人形淨瑠璃の組織とその由來――舞臺のこと――人形の遣ひ方のこと――だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的鄕土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと云つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來、殆ど本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと云はれる。卽ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線彈きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記錄にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くぐつまはし）といふものが見える傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことにある。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歷史と云へるでせう。これに對して三味線は永祿中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが

提携し、慶長の初年あたりは、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、云はば立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音樂上の大成を試み作者近松門左衞門を得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歷のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏內容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歷史的に云ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がかりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大內鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日から大凡二百年前にあたる。但し文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ッ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた。慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪

文楽座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、その以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のはもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、彈く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のことで、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひぱりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音樂は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雜な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

（河竹繁俊氏稿より拔萃）

梅壇女道行の段　シテ　竹本相生太夫　豐竹呂太夫
ワキ　竹本南部太夫　竹本伊達太夫
ツレ　竹本濱太夫　竹本津磨太夫
ツレ　竹本隅若太夫　豐竹松島太夫
豐澤仙糸　豐澤吉五郎
獅子ケ城の段　切　竹本隅若太夫　野澤喜左衛門　野澤重造
竹澤團作　豐澤團伊三　豐澤仙三郎
樓門の段　竹澤團作　竹澤清廣　鶴澤友衛門　野澤松之輔
紅流しの段　竹本相生太夫　豐竹呂太夫　鶴澤清二郎　豐澤仙糸　豐竹吉五郎　豐澤仙糸　竹本南部太夫　竹本伊達太夫　鶴澤重造　野澤喜左衛門

父は唐土
母は日本

國性爺合戰

梅壇女道行の段より獅子ケ城の段まで

解說

支那の明朝が亡び、其遺臣鄭芝龍（老一官）は日本に亡命して、九州平戸の武士、田川氏の女を娶り一子鄭成功（卽ち和藤内）を設けた。其後父子は祖國に歸り、明帝を擁して東寧（臺灣）に據り、清國に對して明朝回復の叛旗を飜した。そして一方鄭芝龍は、我が德川幕府に向つて援兵を乞うたが、それは我が正保三年の事であつた。當時日本に於ても、南海の英傑と謳はれた紀州侯賴宣卿等は、最も熱心な出兵論者であつたが、幕議は遂にこれを不可として、惜しくも出兵の事は止んだのである。

その年、鄭芝龍も連戰功なく、心ならずも清朝に下らざるを得なかつたが、鄭成功はこれに從はず、寛文二年臺灣の土と化すまで、敢然反抗を續けたのであつた。

此の鄭成功——卽ち延平王國性爺を題材とした淨瑠璃は、「國性爺手柄日記」として、元祿十三年末頃に、錦文流に依つて作られてゐるが、正德五年十一月、大阪竹本座に於て「國性爺合戰」全五段が、近松門左衛門の筆によつて舞臺にかけられた。當時の民衆は、珍しい唐風を舞臺に寫した此曲に對し、際物としての興味以上に、時人の耳目を聳動させた事件であつた事や、日本人特有の義に勇み、武勇に勝れた處を舞臺に活躍させた事などから、實に三年越し、十七ケ月間打ち通したと云ふ、未曾有の大當りを取つたのである。そして享保二年二月に

は、引續き同座に於て、近松自身が「國性爺後日合戰」を出した程であつた。

梗概

明朝思宗皇帝の時、右將軍李踏天が韃靼王に內通して、其軍を引入れて王城を陷れ、皇帝を殺害した。大司馬將軍吳三桂は、亂軍中に我が子を犧牲にして幼き太子を助け、これを奉じて九仙山に隱れた。

皇妹梅檀女は、辛うじて船に乘じて敵手を遁れ、我が九州平戶に漂着したが、茲に於て舊臣鄭芝龍老一官の子、和藤內に救はれる事になつた。老一官は帝を諫めたが用ひられなかつた爲、亡命して日本に渡り、日本人を妻として和藤內を生み、既に二十年を過してゐるのだつた。

然るに今、皇妹から祖國の難を聞き、敢然として立つた老一官は、妻と和藤內を伴つて本國に渡り、明朝の再興を計つたのである。そして韃靼國の大將伍將軍甘輝を味方につける可く、これが說得に赴いた。

甘輝は、老一官が先妻との間に設け二歲の時に別れたままになつてゐる娘錦祥女の夫である。

その甘輝の居城——獅子ヶ城の樓門に、老一官夫婦と和藤內の三人が辿りついた。が、要害堅固にして入る事叶はず、又懷しい父や義母、義弟に廻り會へたとは云ふものの、掟きびしく、錦祥女は義と恩愛の枷に苦んだ。そして繩つきでなら云ひ譯も立たうと、一官の老妻は獨り繩にかかり、城內へと

人形

住吉大海童子	吉田光造
梅檀女	桐竹紋司
小むつ	桐竹紋太郎

光之助改メ

樓門の段

和藤內	吉田玉助
老一官	桐竹政龜
和藤內の母	吉田文五郎
錦祥女	桐竹紋十郎
軍兵大ぜい	

獅子ケ城の段

錦祥女　桐竹紋十郎
和藤内の母　吉田文五郎
吾將軍甘輝　桐竹門造
こし元　大ぜい
軍兵　大ぜい

入つた。

夫甘輝が味方をするか否か、其の吉左右の報せは、川に流す白粉は上首尾若し紅なれば不首尾と思へと合圖を決めて、繩つきのまま城内に入つた和藤内の母は、錦祥女と共に甘輝に向ひ、親兄弟の忠誠に與させようと說いたが、韃靼王にも深き恩義のある甘輝は仲々に承諾すべくもなかつた。

一方、門外に合圖を今か〳〵ち待ちあぐむ老一官と、和藤内。が、南無三寶、折から流れて來たのは紅の水、さてこそ味方せぬ甘輝に、母を預けては置かれぬと、和藤内は城内へ驅け入つた。

然して今流されたその紅こそは、錦祥女が自ら胸を抉つた血潮で、死を以て夫を諫めたのであつた。そして母も亦、娘の後を追つて自害したのだ。

遺の甘輝も、此の二人の貞烈な死に動かされ、和藤内に味方して、共に明の再興に努力することになつた。

後、和藤内は延平王國性爺鄭成功と號して、韃靼軍を擊破し、李踏天を屠り、九仙山なる太子を迎へて明朝を再興し、國性爺の武名を顯した。

紅流しの段

和藤内　吉田玉助
吾將軍甘輝　桐竹門造
和藤内の母　吉田文五郎
錦祥女　桐竹紋十郎
軍兵　大ぜい

菅原傳授手習鑑

寺子屋の段

竹本雛太夫

友花改メ

鶴澤燕三

豐竹つばめ太夫

野澤錦糸

豐竹古靭太夫

鶴澤清六

解説

「忠臣藏」「千本櫻」などゝ並んで「菅原」は義太夫淨瑠璃作品中、御承知の如く代表的な演しものの一つであり、文字通り屈指の名作であります。

初演は今日より百九十餘年前、卽ち延享三月八月、大阪の竹本座の勾欄にかけられました。作者は當時の名作者竹田出雲はじめ、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作で、全五段の場割は、序大内の段から口賀茂堤の段で齊世の君と苅屋姫との漏事を後の伏線とし、切の筆道傳授の段が四段目の寺子屋と相照應する構成、跡は門外。二段目は道行。口が汐待の段、切は道明寺で杖折檻、八靡鷄、丞相名殘の各場面、

寺子屋の段

三段目は、口が車場、切は佐太村の茶筌酒、喧嘩、訴訟、櫻丸切腹と展開し四段目は筑紫配所、天拜山の飛梅、化蛙峨の隱れ家、今回上演寺子屋となるのであります。今日一部に流行して居ります「松王屋舗」と云ふのは後世の蛇足で、筋から云へば寺子屋の前になるのであります。五段目は大内の段で時平一味の最期で結末をつけて居ります。

菅原道實公の事績については今更申上げるまでもありませんが、道實公が、左大臣藤原時平の讒言により筑紫に配流の身となり、太宰府に命を終へられたのは醍醐天皇の昌泰三年二月の事と傳へられます。當時の天下の同情は、翕然としてこの溫厚篤學の公に集りましたが、恰もその頃、都に火

災がしばしば越つたり、時平一味のものが相ついで病死したり、清涼殿に落雷があつたり、神變不可思議な出來事が頻發するので、折も折とて上下こぞつてこの變災を、罪無くして配所に沒した菅公の祟りと信じたのであります。畏くも一條天皇は、寛弘元年道實公に最高の位を贈り給ひ、北野天神に行幸あつて此處に菅公を合祀して、その靈を慰められ、以來天神樣と云へば恰も菅公の別稱のごとく考へられるに至つたのであります。

これを戯曲化したものは謠曲「雷電」をはじめ、古く宇治加賀掾の語り物の中にもあり、大近松の「天神記」は直接この「菅原傳授手習鑑」の藍本となつて居ります。初演當時の竹本座は不入續きで經營困難に陥つて居たのでありますが、本編が上場されるや、全大阪擧げての大人氣で、翌年の四月まで、約八ケ月間の大入を續けました。その原因は、作柄が優れて居ることは勿論でありますが、當時大阪で唯一の人氣神である天滿天神の菅公を中心人物に仕立てた所もその人氣を煽つた所以の一つでありませう。殊に作者出雲は、當時の社會記事を巧みに取材して脚色して居ります。この作の生命になつて居る、梅王、松王、櫻丸の三ツ子の兄弟と云ふ着想は、當時大阪市中にあつた事實で、健全な男子の三ツ子が生れ、お上より、鳥目五十貫を下賜され、嘉例により舍人として牛飼に御所へ奉公させられることになつた、と云ふ評判の出來ごとであります。これが直ちに作者たちの筆に移され、源順の「梅は飛び櫻は枯れぬ菅原や、深くも頼む神の誓ひを」の改作「梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に」の歌から想を構へて人物が描き別けられたものでありませう。

全五段中眼目の場面、即ち二段目の道明寺の菅公と菊屋姫との生別、三段目の佐太村の白太夫と櫻丸との死別、四段目の寺子屋の松王夫婦と小太郎の死別、とこの三つの骨肉の別れを作者の松洛、千柳、出雲が各自分擔して工夫を凝し書き上げたことはあまりにも有名な逸話であります。

全段の眼目中の眼目とも云ふべき四の切の寺子屋は、申上げるまでもなく文章と云ひ結構と云ひ、又節付けと云ひ、名に名曲の名に背かないもので、此處に登場する武部源藏と云ふ人物は、當時幕府の書吏で門弟三千と稱せられた有名な書家建部傳内を效かせた妙案であります。それにこの場面は當時の「寺子屋」と云ふ社會相の活寫であつた事は間違ひありません。

かくの如く作者の縷心碎骨して立てた脚色の巧緻は、三味線道の氏神と云はれた初代鶴澤友治郎の琢磨の節付けと相俟つて、「菅原」は今日に至るまで聲價を持續せしめたのであらうと考へられます。殊に初演の人形遣ひ吉田文三郎の考案は菅丞相や、松王梅王櫻丸の衣裳に後世までその樣式が

妻　戸浪　吉田榮三郎
菅　秀才　桐竹小紋
よだれくり　吉田藤一
女房千代　吉田文五郎
一子小太郎　吉田玉男
下男三助　吉田多三郎
武部源藏　桐竹龜松
舍人松王丸　吉田榮三
春藤玄蕃　吉田玉市
御臺所　桐竹紋司
手習子　大ぜい
百姓　大ぜい
取卷　大ぜい

守られ、彌が上にも本編の聲價を高からしめたのであります。

〈一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、教へる人に習ふ子の中に交まる菅秀才。

芹生の片山里、手習ひ師匠武部源藏夫婦は、丞相の一子菅秀才を我が子に仕立てかくまつてゐた。

今日は新しい寺入りの子もあることとて、妻の戸浪は大勢の寺子たちを勵まして手習をさせて居た。

其處へ、どうやら樣子ありげな女房が七つばかりの男の子を連れて訪れた名前を聞けば小太郎と云つて、菅秀才とは同じ位の年配の賢し氣な子であつた。今日からよろしく、とあるので戸浪は、かねて源藏から話のあつた寺入りの子だと悟つた。母親はそゝくさと隣村まで行つて來ると出て行くので、後を追ふ子をなだめつゝ機嫌を取るのであつた。

間もなく外から歸つて來る主の源藏何時になく顏色も青ざめ、思案の腕組みも不機嫌に、出迎への寺子たちを、づゝと見渡したが、いづれを見ても山家育ち、世話甲斐もない役立たず、と思ひあり氣に不興な口をきくのだつた。

夫の顏色の惡いのを見てとつた戸浪は、山家育ちは知れてあること、それより、機嫌直して約束の寺入りの子を見てやつてくれ、と小太郎を引合はせた。と、いたいけなくも手をついて挨拶をする小太郎の顏をじつと見つめた源藏は、忽ち顏色も柔いで、器量すぐれて氣高い生れつき、公卿高家の子息と云つてもおそらく恥かしからず、ハテ扨、そなたはよい子ぢやなア、と喜ばしげにほゝゑんだ。

合點の行かぬ夫の樣子に、子供たちを奥へやつて、戸浪は源藏に今日の仔細を尋ねた。

仔細と云ふのはかく〳〵であつた。今日村の饗應と云つて呼ばれて行つたのは僞りで、庄屋方へ行つてみると、時平の家來春藤玄番に病體ながら松王丸が檢分の役として附添ひ、數百人の人數で源藏を取卷き、訴人によつて源藏方に菅秀才がかくまはれてあること明白、直ちに首打つて渡すか、さなくば、踏み込んで請取らう、と手づめの詰問だつた。源藏も是非に及ばず、首打つて渡す、と約束して歸つて來てはみたものゝ、それは誰か寺子の中に身替りに立つものもあるかと思案の揚句どれもこれも育ちのよい菅秀才とは似ても似つかぬ子供ばかりで、若君の御運もいよ〳〵つきる日が來たかと慨いてゐたのだつた。すると、今日寺入りの小太郎を見れば、滿更烏を鷺とも云はれぬ器量に、これこそと思ひ當る所があつたのである。

戸浪は、これを聞いて、松王は若君の顏をよく見知つて居る筈、と心配し出すのだつたが、若し質と知れた時は松王めを眞二つ、叶はぬ時は若君諸共死出三途の御供せん、と夫が腹を据えるので、夫婦はやがて來る玄番、松王を待ち受けることになつた。

やがて門口から横柄に訪ふ春藤玄番首見る役として病體の松王丸が駕籠に乘つて從づて來た。

村の者たちはこの噂さに我が子大事と迎へに來るのを、玄番は一々呼び出し子供の顏を檢分して歸らせた。

その後、家の中へ入つた二人は、源藏にこの上は寸時も早く若君の首を受取らうと嚴しく促すので、源藏は意を決し首桶持つて奥へ入つた。

松王はあたりを見廻して机の數をしらべ、最前歸つた子供の數より一つ多いと詰るので戸浪は、今日寺入りした子のと云ひかけて口を喞み、これぞ菅秀才のお机文庫、と漸く云ひ拔けた。

奥にはバツタリ首打つ音がして、やがて源藏は白臺に首桶のせて、松王の目通りに据え置いた。

家來たちは下知に從つて、十手を振つて源藏夫婦を取卷くので、源藏は虚と云はば切付けんと、忍びの鍔元をくつろげて堅唾を飲んでまちかまへた。

松王が首桶引きよせ蓋を明ければ、首は小太郎、ためつすがめつ窺ひ見た未、菅秀才の首に紛れなし、と云ひはつたので、檢使の玄番は大喜び、褒美にはかくまつた科許して呉れる、と首を提げ、松王は、かねての願ひの通り病氣保養の暇を願ふ、とそれ〴〵出て行つた。

あとに源藏夫婦は、張りつめた氣もゆるみ、しばしはものも言へぬばかりだつたが、これぞ凡人ならぬ我が君の御高德によつて松王の眼がかすみ、贋首を知らず持つて歸つた、と天地に三拜九拜したのだつた。

其處に一難去つて又一難が湧き出でた。それは、小太郎の母が歸つて來たのでつる。立ち騷ぐ戸浪を引退けた源藏は、何くはぬ面持ちで內へ迎へ入れ樣子を窺つて後から只一と討ちと切り付けた。

女もしれもの、その太刀をはづしてあり合ふ我が子の文庫ではつしと受け止めた。二つになつた文庫の中からはばらばらと出る經帷子に南無阿彌陀佛の六字の幡、源藏はコハいかにと、進みかねるのを女は、菅秀才のお身替りお役に立てて下さつたか、と意外の言葉。驚いた源藏は、して其許は何人の御內證、と尋ねる折しも、門口から、女房悅べ、伜はお役に立つたぞ、入つて來たのは先程の松王だつた。

松王のことばを聞くよりわつと泣き出した最前の女は、松王の女房千代だつたのである。今まで敵と思つてゐた松王がこの不審な樣子に、源藏は意義を正して所存を尋ねた。

松王は三人兄弟の中、一人はなれて時平の家來になつてしまつた。そして親兄弟とも肉緣を切つて恩ある菅丞相へ敵對しなければならなかつた。これも身の因果とは云ひ乍ら、何とかして主從の緣を切らうと作病までかまへて暇を願つたのだが、今日の役目が濟むまで、と今日の仕儀に及んだのだ。松王は、よもや源藏が若君を打つ樣なことはないと信じてゐたけれど、さてその身替りとして誰を、と云こことになつて、女房千代と相談し、二人の中の一子小太郎を、これに立てたのであつた。これが松王夫婦の丞相へのせめてもの御恩返しだつた。

流石に千代は女の身の心弱く、小太郎に別れた時の事を思ひ出し又泣き伏すのだ。松王はこれを叱つたが、けなげな小太郎の最後の樣子を聞き、腸もちぎれる思ひがするのだつた。それにつけても御恩を送らず先立つた弟櫻丸の上を思ひ涙にくれた。

序でながら若君へお土產、と北嵯峨からお連れしたと云ふ丞相の御臺所を若君に引合はせた。

やがて戸浪が奧から抱いて來る小太郎の死骸を乘物に移し入れ、松王夫婦はかねて用意の白裝束となり、源藏夫婦に門火を賴んで野邊の送りに出で立つのであつた。

生寫朝顔日記

宿屋より大井川の段

宿屋の段

駒澤次郎左衛門　竹本織太夫
實ハ宮城阿曾次郎

朝顔　竹本南部太夫
實ハ娘深雪　竹本伊達太夫

岩代多喜太　竹本七五三太夫

下女おなべ　豐竹宮太夫
竹本越名太夫

戎屋德右衛門　竹本相生太夫
豐竹呂太夫

琴　鶴澤觀西翁
野澤勝太郎

解說

この淨瑠璃の基となつたものは、「蹇仇討」などの作者、芝屋芝叟の長話「彝」でありませう。これは淨瑠璃よりも先に、文化九年「生寫彝日記」の名題で歌舞伎狂言として大阪の堀江の芝居で上演されました。

淨瑠璃としては、山田案山子の戯號で近松德叟が「生寫朝顔日記」と題し書き卸したのでありますが、上演に至らず文化七年八月病歿しました。例の「鬱の干ぬ間」の小唄は熊澤蕃山の作と傳へられますが、この物語はこの小唄を中心とした一種の歌物語であつたとも考へられます。

その習年近松柳の手によつて「德叟遺稿朝顔日記」として讀本に刊行され、非常に評判になつたので、天保五年耶麻田加々子と云ふ人が添削して茲に上演を見るに至りました。劇場は大阪稲荷境内の操り座で、大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、明石船別れ、弓之助屋敷、大磯揚屋、小瀬川、摩耶ケ嶽、濱松、島田宿屋、駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱、の五册十五段で、四の切の宿屋は竹本重太夫が語つて居ります。外題は「生寫朝顔話」となつて居り、その後、嘉永三年翠松園と云ふ人の校補により「增補生寫朝顔話」として刊行されました。

現在行はれて居るものはこの時の正本によるものであります。

今回上演の宿屋から大井川は四の切になつて居ります。

梗概

人形

駒澤次郎左衛門 實ハ宮城阿曾次郎	吉田光造
岩代多喜太	吉田玉德
朝顔 實ハ娘深雪	桐竹紋十郎
下女おなべ	吉田兵次
戎屋德右衛門	吉田小兵吉

宿屋の段

駒澤次郎左衛門と名を改めた宮城阿曾次郎はその後、主君大内義興の放埒につけ入る奸臣岩代の惡事に心を碎いて居た。

駒澤はこの度、岩代と同道して國表から江戸へ赴く途中、島田宿戎屋德右衛門方へ泊つた。

戎屋の奥の間、ふと駒澤の眼にとまつたのは街立の張交ぜにある扇の地紙だつた。それには、いつぞやの朝顔の歌が書いてあるのだ。何者がこの東路の驛路に諷ひ傳へて、と不思議に思はないでは居られなかつた。

亭主德右衛門に尋ねてみると、この邊を朝顔の歌を歌つて袖乞ひする盲目の女がある。と云ふのだ。しかし、元は中國筋のなにがしと云ふ人の娘とか器量はよし、聲はよし、人々はいぢらしがつて、朝顔朝顔とその歌を知らないものは無いと云ふ話だつた。駒澤は若しや云ひ交したわが妻ではないかと胸をとゞろかせたが、何知らぬ態で、その朝顔を呼んでみたいと云ひ出すのだつた。

やがて朝顔はやつて來た。盲目の姿こそ變つて居るが矢張りそれは深雪のなれの果だつた。同席の岩代は、それとも知らず、見苦しい女めと罵しるのを止め、駒澤は朝顔の歌を所望した。あれ程戀焦れる夫の阿曾次郎が眼前に居るとも知らず、深雪はかなしい唄聲に朝顔の歌を歌つた。

「露の干ぬ間の朝顔を、照らす日かげのつれ無きに、あはれ一むら雨の、はら〳〵と降れかし」

駒澤は、はら〳〵と落涙にむせた。岩代は興に乘つて更は歌はさうとしたけれど、駒澤はもう此の唄聲に耐へら

大井川の段

呂賀太夫改メ
豐竹松太夫

（鶴澤友衛門
（野澤松之輔

人形

朝顔實ハ娘深雪　桐竹紋十郎
川越人足大ぜい

れなかつた。岩代に問はれるまゝに朝顔は今までの身の上話しをした。

駒澤は、此處で名乘らうとはせず、唯若しその夫が聞くならば、嘸滿足に思ふであらう、と云つたのみ、やがて朝顔は立つて行つた。

岩代を先に臥せらせた駒澤は、德右衛門を呼んで、今一度朝顔に會ひたいと云つた。と云つても出立は正七ツ、今から呼びにやつても到底間に合はないと云ふのだ。仕方なく駒澤は、今の女に謝禮としてと、金子と扇と祕法の眼藥を德右衛門にあづけた。

時計はも早七ツ、岩代は同勢引連れ出立を促すので駒澤も思ひを殘して我屋を出た。

折から立歸へつて來た深雪、德右衛門は早速最前の品々を渡した。扇を開いて見ると金地に一輪の朝顔、それに露の干ぬ間の歌が書いてあつた。裏に宮城阿曾次郎こと駒澤次郎左衛門とある。深雪は仰天した。これこそわが尋ねる夫、跡追ひかけて、と盲目の杖を力に馳り出さうとした。折あしくも降り出す雨に、德右衛門が危いと止めるのも聞かず、大井川の渡し場へといそいだ。

大井川の段

深雪が大井川へ來た時には、駒澤の一行が渡つてしまつた後、折柄の出水で渡しは止つてしまつた。もう如何なに泣き叫んでも追付くことは出來なかつた。

○

其處へ馳けつけて來た德右衛門は、實は秋月の舊臣古部三郎兵衛であつた。德右衛門の血で最前駒澤が遣して行つた祕法の眼藥を飲むと深雪の眼病は治り、忠僕關助の働きにより首尾よく駒澤に遇ふことが出來目出度く深雪は駒澤と夫婦になることが出來たのであつた。

えぼお賞鑑　昭和十八年

東京興行者協會

戰時下興行場ニ於ケル防空上ノ措置要綱

○空襲警報發令に依り各興行場の興行中止の際に於ける入場券の取扱に關する件

一、興行開始ノ前賣入場券等ノ入場料ハ原則トシテ拂戻（現金）ヲ爲スコト　但シ相手方ノ承諾ヲ受ケ次回興行ヲ開始シタル日又ハ特ニ指定シタル日ノ興行ニ其ノ入場券等ヲ有効トシテ入場セシムルコト

前項ノ拂戻ハ警報解除後爲スコト

二、興行開始後ノ入場料ハ拂戻（現金）ヲ爲サザルコト

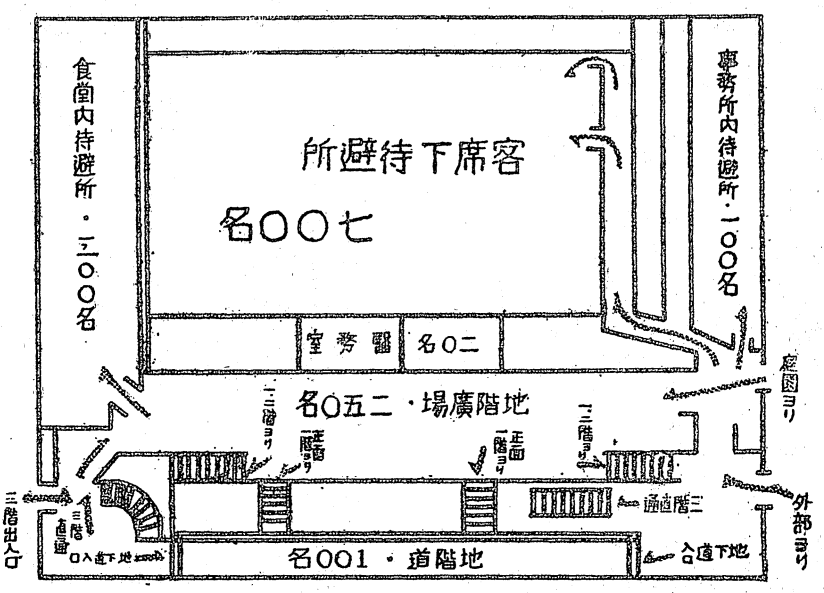
三、興行開始中興行ヲ中止シタル時ハ其ノ中止時期ガ一回興行ニ要スル時間ノ概ネ三分ノ二ヲ經過セサル場合ハ其ノ入場券等ヲ以テ再入場又ハ割引入場ヲ爲サシムルコト

但シ假設興行、巡回興行又ハ空襲ニ依リ興行場被害ヲ受ケ其ノ他興行再開不能ナル時ハ其ノ入場券ハ無効トス

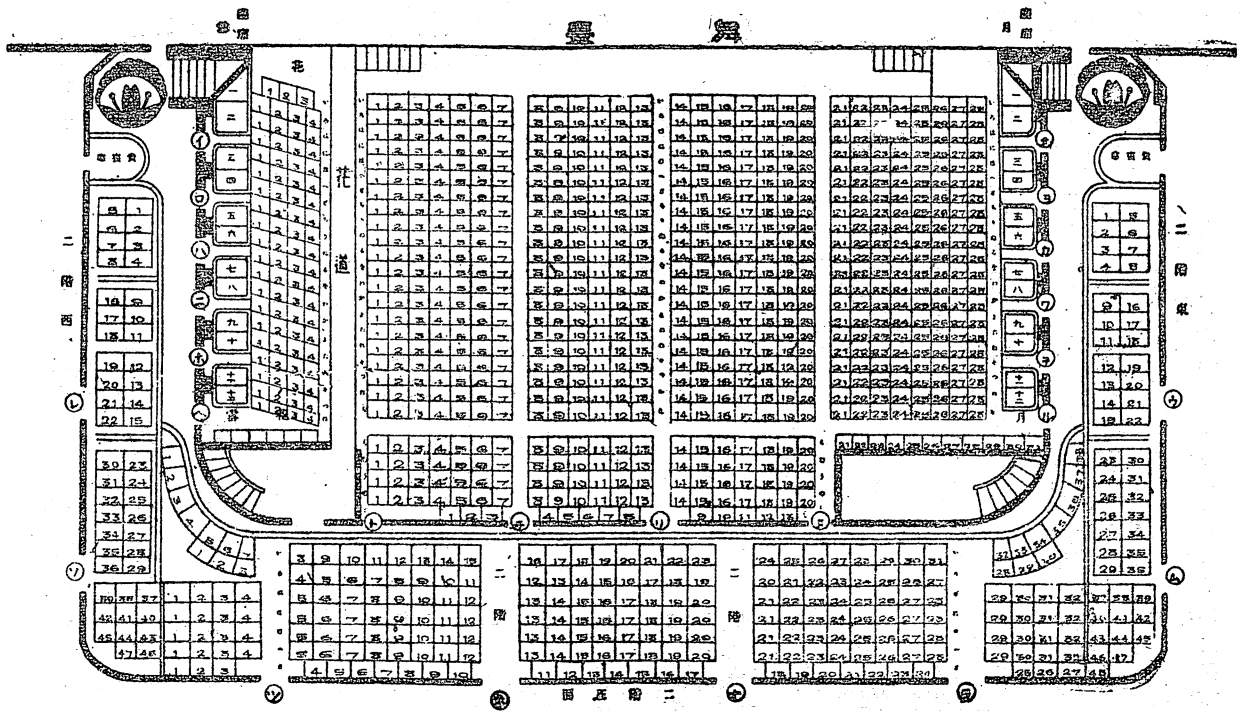
四、再入場ハ次回同種興行ヲナス時ハ殘存番組ノ興行ニ限リ有効トス

五、割引入場料ハ其ノ入場券等ノ料金ノ半額以下トシ次回興行ノ全番組ヲ觀賞セシムルコト

○其の他當局より興行時間入場人員及入場料に關し特に指示ありたる時は其の指示に依ること



新橋演舞場座席表



開場毎に篤き御愛顧を賜り謹んで御厚禮申上げます

當劇場は諸事皆様の御期待に反かぬ様懸命に努力致して居りますが、何事によらず皆様直接の貴重なる御言葉を頂きたう存じます。

「劇場御使用に就て」劇場を各種の御催し、例へば演劇公演、音樂會、舞踊公演、お浚ひ、温習會、發表會、披露會、祝賀會、慰安會に御利用下さる様御願ひ申上げます。

お願ひ

一、お席の番號を御自宅にもお印し置き下されば御急用御呼出しに御便利で御座います。

一、お帽子は椅子の下へ。御婦人方の庇の廣いお帽子は後ろの人の邪魔になりますから、御遠慮願ひます。

一、御貴重品はお席へお置きにならぬやう。

一、御携帶品は預り所へ。

一、御食事は一幕前に御申付を。

一、喫煙[illegible]食事は觀客席では固くお斷り致します。

一、御氣分の惡い方は係員に御申出を。

一、お忘れもの御紛失は直ちに係員へ御屆を。

一、寫眞撮影當場内では特定寫眞班以外は固くお斷り致します。

一、汽車の時間は萬承り所へ。

一、お電話は一階右側預り所、公衆電話は一階東西に御座います。

一、御履物御傘などは必ず一幕前に御受取下さい。

一、係員の不行屆場内設備の缺點は御遠慮なく御申聞け下さる様。

一、俄雨の際はお客様の爲に簡便な方法で雨傘の用意がしてございますから何卒係員に御申出でを。

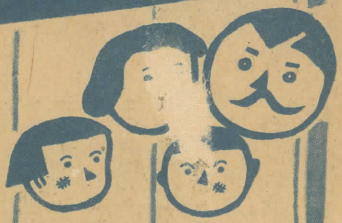
一、[illegible]其他にお氣付の點は何卒御教示を願ひます。

東橋區本挽町　新橋演舞場

支配人　藤井麟太郎

昭和十八年六月廿八日印刷　東京市豐島區池袋町三丁目一四二二
編輯兼發行人　衣笠靜夫　東東二〇四

スプロッロド油肝ミツワ



一家総はりきり

無病息災

戰場は吾々の身近かに續いております。最後の勝利を確保する迄、一億同胞みな健康であらねばなりません。增産に挺身する人も勉學する人も、家庭を護る人も、こぞつて張り切つた生活をいたしませう。

不足しがちな榮養を綜合的に攝取する必要があります。本劑は各種の榮養素を多角的に含有し且つ完全乳化してありますから胃腸障害を起す心配もなく吸收いたします。

毎日一顆——二顆

ミツワ石鹸本舗藥品部

專賣特許

ゼオラ

藥用齒磨

生活の科學化は手近から

私共の生活に科學性を取入れる事は、最も必要な事です。徒らに遠大な物を希まづとも、まづ最も身近にあるものから心がけるべきで、例へば、朝に夕に私共の生活に親しまれている齒磨の科學化こそ手近で且つ有効的です。

主劑ゼオライトの持つ吸着・置換・收斂の三大科學作用は豫防齒科醫學多年研究の所産であり、齒槽膿漏の完全豫防と同時に、齒根の强化を圖り、齒根の强化いたします。

こんなお方はゼひゼオラを！

1 齒を强く美しくと望む方
2 林檎を嚙むと血の出る方
3 齒刷子を使ふと血の出る方
4 むし齒が多くて御困りの方
5 咀嚼力が不充分で困る方
6 在來品に御不滿の方

税共　廿八錢

㊟ 定價一部金貳拾錢

[redacted]

ミツワ石鹸本舗藥品部

米澤

(東東204)